

海の森は語る

「藻場」ってどんな場所？

ワカメのお味噌汁、ヒジキの煮物、おにぎりの海苔。日本人はふだんからさまざまな海藻を食べています。また海藻の成分は、歯磨き粉や消火剤の泡、アイスクリームやハムなどの加工食品、化粧品や医薬品などに使われています。これらの海藻や、海草（海で育つ被子植物）が密集している場所のことを、藻場（もば）と呼びます。

海藻や海草は、光合成によって成長します。そのため、太陽の光が届く浅い海でしか生きられません。つまり、私たちの住む陸地からすぐ近くの海に、海藻や海草が広がる藻場があるのです。

藻場は「海の森」と呼ばれています。森にはたくさんの木が生えているように、藻場にもさまざまな色や形の海藻が生い茂っています。また海草は、草原のように広がっています。

多くの魚類が、藻場を産卵場として利用します。また体の小さな生物は、ジャングルのように海藻や海草が生える場所にいることで、天敵となる大型魚などの捕食者から身を隠すことができます。海藻や海草についているとても小さな微生物を食べる甲殻類や魚類、また直接海藻を食べる貝類などの生物もすんでいます。

藻場は多くの生物にとって食べ物が豊富にある場所です。そしてそれらを食べる大型生物が集まります。藻場には食う食われるの食物連鎖があり、ひとつの生態系がつけられているのです。

豊かな「藻場」に必要な条件

陸上の植物が育つためには、水、二酸化炭素、太陽の光、そして土壌に含まれる多種多様な栄養が必要です。海藻や海草も同様に、成長するにはこれらの要素が欠かせません。なかでも海藻が育つために必要な窒素やリンなどの栄養は、主に陸地からの供給が重要です。森や林などの腐葉土や岩石、田んぼや畑の間を雨水が流れ、川を通って海へと栄養が運ばれることで、豊かな藻場が維持されます。

また海藻がつくための岩場や石などの硬い地面、海草が根を張るための砂地も必要です。沿岸開発により浅い海が埋め立てられるとこれらの環境が失われ、藻場は消えてしまいます。

日本は海に囲まれた島国です。複雑な地形をもつ海岸線には、岩礁や砂浜、干潟が広がっています。さらに日本沿岸には寒流や暖流が流れるなど多様な環境があります。これらのおかげで、内湾の砂地には「アマモ場」、岩場や石が転がっている場所には「ガラモ場」、暖流の影響を受ける場所では「アラメ・カジメ場」、寒流の影響を受ける場所では「コンブ場」といったさまざまな藻場が存在しています。

日本人が古くから多様な海藻を食べてこられたのは、このような環境条件があったからこそといえるでしょう。

岩の上を埋め尽くす海藻、ヒジキ ▶



必ず知っておきたい「かいそう」のちがひ

「海藻」と「海草」は、似ているようで異なります。海藻は海や汽水域に生息し、肉眼で見られる多細胞の藻類（緑藻、紅藻、褐藻）のことです。海草は、海の中で花を咲かせて種を作り生育する種子植物のことをいいます。海藻は「うみも」海草は「うみくさ」と呼ぶこともあります。

■海藻

海藻の体は「根・葉・茎」がハッキリ分かれておらず、胞子で増えます。根に見える部分は岩につくためのものです。海水中に溶け込んでいる栄養を、体全体で吸収しながら成長します。

海藻は陸上植物と異なり、海水温が低い冬から春に最も多くみられます。

日本沿岸には1500種を超える海藻が生育しています。

▼紅藻



▼緑藻



▼褐藻（ワカメ）



▼浜に流れ着いた海藻



■海草

海草は、陸上の被子植物が海へと戻ったものです。体は「根・茎（地下茎）・葉」を区別できます。陸上植物と同じように根から栄養を吸収し、花を咲かせ、種を発芽させて増えていきます。

▼砂地に生育する海草（リュウキュウアマモ/沖縄県石垣市）



すごいで「藻場」！わずかな面積、重要な役割

藻場は「岩礁や砂地」「太陽の光」「陸からの栄養供給」が必要のため、太陽光が届く浅い水深で、川や地下から水が注ぎこむ沿岸から近い場所にしか分布できません。海は地球の表面積の約70パーセントを占め、深さは平均3000メートルを超えます。その中で藻場の面積はほんのわずかですが、その役割はとても重要です。

藻場は、多くの命を育み生物多様性を維持するだけでなく、光合成によって二酸化炭素を取り込み、酸素を放出しています。窒素やリンなどを吸収することで富栄養化を防ぎ、水質を浄化しています。また波浪をやわらげたり、砂の流失をくい止める効果もあります。沿岸域に広がる藻場は、環境学習やレクリエーションの場としても重要です。

最近「ブルーカーボン」が注目されています。ブルーカーボンとは大気中の二酸化炭素を、海藻や海草、植物プランクトンなどが光合成によって吸収し、炭素（カーボン）を海の中にとどめておくことを言います（※1）。ブルーカーボンは新たな地球温暖化対策として期待が寄せられており、藻場の保全や再生に向けた取り組みが全国各地で始まっています。

※1 ブルーカーボンの吸収源としては、海藻藻場、海草藻場のほかに、塩性湿地や干潟、マングローブ林があげられる。



▲陸からの栄養が海へ注ぎ込まれ、豊かな藻場が形成される。
(福岡県北九州市 血倉山より響灘・玄界灘を望む)



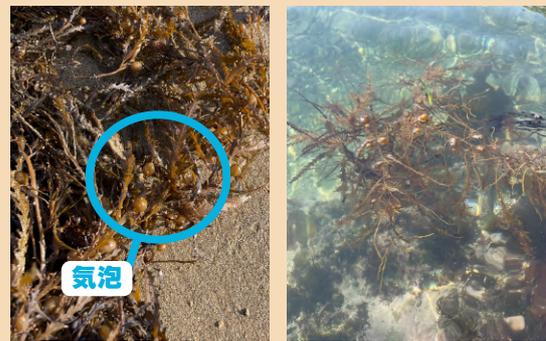
▲海の森「藻場」にはたくさんの生物が集まる。
(わかちく史料館 海洋環境啓発動画「私たちの暮らしと海」より)

旅する海藻、流れ藻。

季節の変化や波の流れによってちぎれた海藻は、分解されて海の栄養になったり、海面に浮かんで他の生物の隠れ家やエサ場、産卵場になります。

海底からちぎれて海面を浮遊している海藻のことを「流れ藻」と呼びます。流れ藻の多くはホンダワラと呼ばれる種類の海藻です。

ホンダワラが海面に浮く理由は、空気の入った気泡をもっているからです。海岸に漂着している海藻を見つけたら、丸い気泡を探してみてください。それは、もしかしたら、海流によって旅をしながら多くの命を育む「流れ藻」かもしれません。



▲気泡をつぶすと「プチッ」と音が聞こえる。
流れ藻の間には小さなワレカラやヨコエビなどが暮らしている。

「藻場」を守るために何ができる？

海の森「藻場」は、あまり知られていない存在です。人びとが海中の様子を知る機会は少なく、藻場の重要性が知られないままに、沿岸開発によって海が埋め立てられています。海中に土砂が大量に堆積すると、小さな海藻は育つことができなくなります。さらに海水温の上昇などによって、海藻を食べる生物が増えたり、海藻の成長が妨げられたりするなど、藻場の環境は脅かされています。

海の森が消失すると生物多様性が失われてしまい、水産資源の減少にもつながります。わたしたちには何ができるのでしょうか？

豊かな海を守るためには、一人でも多くの人に「藻場」の存在を知ってもらうことが大切です。藻場にはさまざまな生物が暮らしており、生物多様性の基盤をつくっていること。藻場があるからこそ魚や海藻が日常的に食べられること。森や川を通じて、私たちの暮らしが海藻や海草の広がる海へと繋がっていること。人びとが身近な海に目を向け、環境問題を意識した行動を促すために、まずは「藻場」の存在を伝えていくことから始めてみませんか。